様　式　C－１９、F－１９、Z－１９　（共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３３２００９０
研究課題名（和文）社会・文化的場の共創と言語使用：母語話者視点による語用論理論の構築

研究課題名（英文）Co-creation of Socio-cultural Ba/field and Language Use: Construction of a Pragmatic Theory from Native Speakers' Point of View

研究代表者
藤井　洋子（FUJII, YOKO）

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：３０１５７７７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　14,600,000円、（間接経費）　4,380,000円

研究成果の概要（和文）：この3年間の主な研究成果として、(1) 国際語用論学会（2011年、2013年）にて、研究成果の発表を行ったこと、(2) 2012年2月にタイのチュラロンコン大学にて、タイ語のミスター・オー・コーパス・データを収集したこと、(3) 2012年にJournal of Pragmaticsの『解放的語用論』特集号第二部を発行したこと、(4) 2013年1月、米国バークレイにて、2013年3月、日本女子大学にて、国際ワークショップを行ったこと、(5) 2014年3月、『解放的語用論への挑戦』と題する本を出版したこと、(6) 全体を通じて、場の理論の理解を深められたことなどが挙げられる。

研究成果の概要（英文）：The main outcomes of this three-year projects are summarized as follows: (1) the presentation of researches at the 12th and 13th International Pragmatic Conferences in 2011 and 2013; (2) the creation of new data collection of Mister O Corpus in Thai at Chulalongkorn University in February, 2012; (3) the publication of the second Special Issue of Emancipatory Pragmatics (Journal of Pragmatics Vol. 44) in April, 2012; (4) the holdings of two International Closed Workshops at Berkeley, U.S.A. in January, 2013 and Japan Women's University in March, 2013; (5) the publication of a Japanese book, A Challenge to Emancipatory Pragmatics, in March, 2014; (6) the wider and deeper understanding of Ba-theory in this three years.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、語用論

キーワード：場の共創　社会・文化的場　母語話者視点　解放的語用論　文化・インターアクション・言語　西欧・非西欧　ミスター・オー・コーパス　言語使用

１．研究開始当初の背景

本研究は、平成 20～22 年度に助成を受けた科学研究費基盤研究（B）（『母語話者視点』に基づく解放的語用論の展開：諸言語の談話データの分析を通じて）：18320069 藤井洋子代表）の延長線上に位置する。この研究においては、西欧の言語･文化に依拠して構築された従来の言語･語用論理論を、アジア、アフリカ、メゾ･アメリカ地域の言語･文化を視野にいれて検討し、西欧主導の理論的パラダイムからの「解放的」な語用論理論の展開を目指してきた。

従来の語用論研究や談話分析においては、テキスト内部の体系性（例えばテーマの「一貫性」や「結束性」、意味内容にもとづく「意図」「含意」といった特徴）が分析の中心となっている（Halliday & Hasan 1976; Austin 1960; Searle 1969）。このような概念を所与のものとすることで、「談話すること」の創発的意味や文化的規範への配慮は分析の射程外に置かれてきた。同時に研究者は、発話は個人の自由な意図によってなされ、言表内容をもとに解され、テキストを通じて分析可能であるという立場を堅持してきた。それゆえ相互行為メカニズムの言語間比較分析やテキストを超えたジェスチャー／パラ言語を含む考察、社会･文化的背景としてのコンテクストを視野に入れた談話研究などは、いまだ発展途上段階にある（Hanks 2009; Enfield & Stivers 2007; Goddard 2006）。

本研究組織では、既存の語用論研究の限界とそれを打破する方法として *JoP* 特集号において提案した「解放的語用論」（Hanks, Ide & Katagiri 2009）の理念を基軸とする。同様の比較語用論的なアプローチで成果を上げた事例として、マックス･プランク心理言語学研究所の研究者による空間認知研究（Levinson 2003）や会話分析研究（Stivers, Enfield & Levinson 2010）があるが、本研究では、そこで用いられたような統一的なテンプレートや方法論によって世界の多様な言語現象を考察するのではなく、各々の言語･文化地域を代表する研究者が、「母語話者の視点」から文化的な重要度に応じて様々な現象を分析するという点で一線を画す。また、異なる文化における言語行動がどの程度共通の動機付けや意図に基づくのかは単純な項目比較で見えてくるものではない。むしろ、そのような意図と動機付けの文化的卓立性（Duranti 2006; Tomasello & Carpenter 2007）や各文化の依拠する言語的多様性（Evans & Levinson 2009）を十分に踏まえたうえで、「土着の」視点から談話データを精査することではじめて見えてくるものである。

２．研究の目的

本研究においては、「解放的語用論」の理念を通じて「母語話者」の世界観とその背後に潜む文化的･言語的多様性までも包含した学問のあり方を提示することが目的である。具体的には、まず本研究組織が対象とする言語にみられる顕著な文化の鍵概念（「わきまえ」や「和」などに相当する概念）を抽出し、そしてこれらがどのような文化的実践を通じて構築されるのかを、日本を含むアジア地域の言語、英語などの西欧言語、またアジア以外の非西欧言語との三角測量により検証し、汎用性の高い語用論モデルとしての「解放的語用論」の意義と有用性を明らかにする。

３．研究の方法

研究方法は、個々の構成員による「個別研究」と全体での「共同討議」からなるニ本立てである。

(1)「個別研究」の資料は、固有および共通データ（「ミスター・オー・コーパス」）から成る。固有データの収集は各研究者に任されているが、共通データは本研究組織の前身によりかなりの部分が収集済みである。

(2)「共同討議」では、各自の研究成果を（文字通り世界各地から）持ち寄り、グループ内での共有化と外部の専門家を交えた討論を通じて理解を深め、汎用性のある言語的／語用論的理論の礎を築く。

４．研究成果

3 年間を通し、上記の研究方法により、個別研究を遂行すると同時に、全体として、以下のような成果を上げることができた。

(1)「解放的語用論」について、２つの研究論文集の出版により、広く認識されるようになった。第一には、国際学術雑誌に 2 回目となる「解放的語用論」の特集号を組むことができたこと。第二に、日本語による『解放的語用論への挑戦』と題した本を出版することができたこと。

(2) タイ語によるミスター・オー・コーパスのデータ構築が実現できたこと。

(3)「場の理論」の理解をより深めるため、また、西欧への提示のために、海外研究協力者である米国・カリフォルニア大学バークレイ校の Willian Hanks 教授を招いて、多岐にわたる側面から「場の理論」の理解を図るべく対談および研究会を行った。

以下に、これらについて報告する。

(1)　**「解放的語用論」について**

これまでの語用論理論は主に西欧のことばを基に構築されたものであった。これらの理論を日本語に当てはめて分析していくなら、当てはまるところを掬い出すことはできても、社会も文化も異なる日本語の大事な部分について充分な説明を行うことは難しい。このような問題意識を持ち、本プロジェクトでは、世界の言語・文化を基にした理論構築を目指し、異言語・異文化で比較可能なデータを収集してきた。これが、日本語・英語・韓国語・タイ語・リビアアラビア語で収集したミスター・オー・コーパスである。これらのデータをそれぞれの母語話者である研究

分担者、海外研究協力者が分析、研究を行ってきた。そこには既成の語用論理論では説明のできない言語実践が見られ、それぞれの母語話者の持つ社会・文化的前提を説明するための新たな語用論理論の構築に挑戦していく研究姿勢が求められる。このような語用論の新しい姿が「解放的語用論」である。この名のもとに出版された論文集 2 篇が以下のものである。

①Journal of Pragmatics Vol. 44, Special Issues: Towards an Emancipatory Pragmatics Part II. 以下は、その執筆者とタイトルである。

W.F. Hanks, Modalities of co-participation. N. R. Norrick, Listening practices in English conversation: The responses responses elicit. K. Sugawara, Interactive significance of simultaneous discourse or overlap in everyday conversation among |Gui former foragers. S. Intachakra, Politeness motivated by ‘heart’ and ‘binary relationality’ in Thai culture. Y. Fujii, Differences of situating Self in the place/*ba* of interaction between the Japanese and American English speakers. K. Horie, The interaction origin of nominal predicate structure in Japanese: A comparative and historical pragmatic perspective. K. Kataoka, The “body poetics”: Repeated rhythm as a cultural asset for Japanese life-saving instruction. J. L. Mey, Anticipatory pragmatics.

② 『解放的語用論への挑戦』
第 1 章　井出祥子. 「解放的語用論とミスター・オー・コーパスの意義」　第 2 章　堀江薫. 「文末名詞化構文の相互行為機能」　第 3 章　藤井洋子・金明姫. 「課題達成過程における相互行為の言語文化比較」第 4 章　植野貴志子. 「問いかけ発話に見られる日本人の先生と学生の社会的関係」　第 5 章　「課題達成談話における日英語話者の視線配布について」　第 6 章　片桐恭弘.「対話から見た権威の様態について」

(2)　タイ語によるミスター・オー・コーパスのデータ収集と分析

①タイ語ミスター・オー・コーパス収録

2008 年のリビア・アラビア語に続き、2012 年 2 月には、タイのチュラロンコン大学にて、タイ語によるミスター・オー・コーパスデータ収録を行った。これまで収録した日本語・アメリカ英語・韓国語・リビア・アラビア語と同様に異なる言語・文化背景を通じて、可能な限り統一的な比較を可能とするために、これまでのデータ収集の設定と同様の条件でデータを収集するために、日本から同じ技術者に同行してもらって、課題達成、ナラティブ、自由対話の三種類のデータを収集した。

収集日時： 2012 年 2 月 11 日、13 日

収集場所： Chulalongkorn 大学、タイ・バンコック

参加者：チュラロンコン大学 Natthaporn 教授, タマサット大学 Intachakra 教授とその大学院生

実験協力者：チュラロンコン大学の教員と大学生全 22 ペア（全員女性）

対話課題：物語構成課題、ナラティブ課題、自由対話

収集方法：ビデオ収録、音声収録

②タイ語データの分析

タイ語ミスター・オー・コーパスの物語構成課題対話を対象として、チュラロンコン大学の Natthaporn 教授と Siriporn 准教授が Fujii(2012)の方法論を用いて分析を行った。その経過は、2013 年 3 月に日本女子大学で開催した Mister O Corpus の Closed Workshop (Asian WS)において発表された。その結果、日本人同志の課題達成対話に見られるように、相互協調型の言語実践が認められたが、日本人ほどには相手からのフィードバックを求めるような言語実践は認められなかった。一方、タイ語での相互作用ではジョークの頻度が高く見られたことが特徴的であった。また、Intachakra 教授は、Mister O Corpus のデータを分析し、タイ語におけるポライトネス・敬語のダイナミックな敬語使用についての研究を行っている。これらの研究は引き続き行われている。

(3)「場の理論」のより深い理解への歩み

「和」、「わきまえ」と共に「場」は、解放的語用論プロジェクトにおいて鍵となる概念としてきたが、この 3 年間、場を世界に広める歩みを進めた。研究者が研究発表（発表論文参照）において個々の研究を通じて場の実証的・理論的な議論が重ねられた。平成 24 年 1 月に実施された米国カリフォルニア大学・バークレー校での「解放的語用論のワークショップ」で場の理解をめぐり既存の類似概念 field との異なりも含めて場の理解を深める討論が行われた。同年 3 月に日本女子大学で行われたアジア人による「ミスター・オー・コーパスの国際ワークショップ」では、タイ語のミスター・オー・コーパスの談話を場の理論で実証する研究、日英語比較の実証的結果の場の理論による解釈が行われた。英語と日本語の談話諸現象（くりかえし、問いかけ、あいづち他）の異なりに通底する何かがあり、その何かは、場の理論を導入することによって説明することができる。つまり、欧米の言語を下敷きにして構築された普遍的とされる語用論理論やそれを前提とする先行研究では説明できない日本語の談話現象が、場の理論をもって初めて明確に説明されることがわかった。

また、カリフォルニア大学バークレー校言語人類学教授兼人文科学・社会科学研究所（Social Science Matrix）所長ハンクス氏は、21 世紀の世界の諸問題を克服するため、既存のフィロソフィーを補完するものとして場の考え、場の理論に深い興味をもたれていることから、本プロジェクトでは、海外共同研

究者である氏に場を集中的に理解してもらう企画を立てた。まず、早稲田大学教授大塚正之氏（『場所の哲学』の著者）とのメール交換による対談を平成24年12月から平成26年3月まで行って準備し、平成26年3月25日から 29 日まで氏を東京に招聘した。メール対談を踏まえた対面対談、場の理論の創始者清水博氏との対談、加えて場の理論の真髄を支える場の文化として、鎌倉円覚寺管長に相見、坐禅、茶道、合気道、能、柳生新陰流剣道を体験していただいた。平成 26 年度中に出版予定の *JoP* 特集号第３号 Introduction 'From Practice Theory to Ba Theory'、第４号の Introduction は場に関する論文がハンクス氏によって書かれる予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）

① Kataoka, Kuniyoshi. Verbal and non-verbal convergence on discursive assets of Japanese speakers: An ethnopoetic analysis of repeated gestures by Japanese first-aid instructors. *Japanese Language and Literature* 45(1). 227-253. (2011)（査読有）
② 片岡邦好「間主観性とマルチモダリティ：直示表現とジェスチャーによる仮想空間の談話的共有について」『社会言語科学』14(1). 61-81. (2011)（査読有）
③ 堀江薫「言語類型論」『日本語学』臨時増刊号（明治書院）30(14). 76-85. (2011)（査読有）
④ Takanashi, Hiroko. Complementary Stylistic Resonance in Japanese Play Framing. *Pragmatics* 21(2). 231-264. (2011)（査読有）
⑤ Takanashi, Hiroko. Introduction: Reframing Framing: Interaction and the Constitution of Culture and Society. *Pragmatics* 21(2). 185-190. (2011)（査読有）
⑥ Fujii, Yoko. Differences of situating Self in the place/ba of interaction between the Japanese and American English speakers. *Journal of Pragmatics* 44(5). 636-662. (2012)（査読有）
⑦ Fujii, Yoko. Social indexicality of the "zero" form of address terms in Japanese: The interpretation from the Amae concept on the basis of" inseparable self and the other".『日本女子大学文学部紀要』第 60 号. 73-86. (2012)（査読無）
⑧ Horie, Kaoru. The Interactional Origin of Nominal Predicate Structure in Japanese: A Comparative and Historical Pragmatic Perspective. *Journal of Pragmatics* 44(5). 663-679. (2012)（査読有）
⑨ Kataoka, Kuniyoshi. The "body poetics": Repeated rhythm as a cultural asset for Japanese life-saving instruction. *Journal of Pragmatics* 44 (5). 680-704. (2012)（査読有）
⑩ Katagiri, Yasuhiro. Cultural Variations in Authority Management in Interaction. *Proceedings of the 34th Annual Meeting of the Cognitive Science Society.* 2717. (2012)（査読有）
⑪ 阿部圭子「助言談話における結束性」『共立国際』第 30 号. 21-38. (2012)（査読無）
⑫ Kataoka, Kuniyoshi. "We just don't get it right!": Multimodal competence for resolving spatial conflict in way finding discourse. *Language & Communication* 33 (4), Part A. 404-419. (2013)（査読有）
⑬ Kataoka, K., Ikeda, K., and Besnier, N. Introduction: Decentering and Recentering Communicative Competence. *Language & Communication* 33 (4), Part A. 345-350. (2013)（査読有）
⑭ 井出祥子・櫻井千佳子「場の理論」から見た言語『日本認知言語学会論文集』13. 612-617. (2013)（査読無）
⑮ 植野貴志子　問いかけ発話の社会指標性－上下関係における役割の指標『ことばと人間』1-17. (2013)（査読有）
⑯ Takanashi, Hiroko. Multifunctionality of the Japanese Simile Marker *Mitaina*: Its Evolution to an Interactional Modal Particle.『英米文学研究』第 49 号. 25-60. (2014)（査読無）

〔学会発表〕（計 27 件）

① Fujii, Yoko. Interchangeability of first and second person pronouns in Japanese: An interpretation in terms of the theory of 'ba'. The 12th International Pragmatics Conference. University of Manchester, UK. (2011)
② Fujii, Yoko. Referential shifting between the first and second person pronouns in Japanese. 20th International Conference on Historical Linguistics (ICHLXX) . 国立民族学博物館. (2011)
③ 片桐恭弘 会話インタラクションの文化パラメータ. 言語科学会第 13 回年次国際大会関西大学.　(2011)（招待）
④ Katagiri, Yasuhiro. Authority dependence in joint task conversations. The 12th International Pragmatics Conference. University of Manchester, UK. (2011)
⑥ Kataoka, Kuniyoshi. An ethnopoetic multimodal analysis of instructional discourse: Patterned gestural repetition as an implicit cultural norm. The 12th International Pragmatics Conference. University of Manchester, UK. (2011)
⑦ Kataoka, Kuniyoshi. Synchronic and diachronic variation of spatial expressions in

Japanese way-finding discourse. 20th International Conference on Historical Linguistics (ICHLXX). 国立民族学博物館. (2011)

⑧ Kataoka, Kuniyoshi. “Trading places” and intersubjective understanding of spatial perspectives. Symposium on “Aspects of meaning in discourse.” 14th Annual Meeting of the Pragmatics Society of Japan. 京都外国語大学. (2011)（招待）

⑨ Horie, Kaoru. The “open-endedness” of Japanese utterances: From interactional, historical, and comparative perspectives The 12th International Pragmatics Conference. University of Manchester, UK. (2011)

⑩ Ide, Sachiko. Let the wind blow from the East: Using the ‘ba (field)’ theory to explain how two strangers cocreate a story. The 12th International Pragmatics Conference. University of Manchester, UK. (2011) (Presidential Lecture)（招待）

⑪ Ide, Sachiko and Kishiko Ueno. Ba oriented perspective and language practice. International Workshop on Linguistics of BA. 早稲田大学. (2011) （招待）

⑫ Abe, Keiko. A study of persuasion strategies in U.S. and Japanese advice giving discourse. The 12th International Pragmatics Conference. University of Manchester, UK. (2011)

⑬ Takanashi, Hiroko. Context as socio-cultural resources and consequences: The case of complementary stylistic resonance. The 12th International Pragmatics Conference. University of Manchester, UK. (2011)

⑭ Katagiri, Yasuhiro. Modeling cultural factors in human interactions: An attempt in linguistics of BA. Emancipatory Pragmatics Meeting. Chulalongkorn University, Thailand. (2012)

⑮ Fujii, Yoko. Independent collaboration to establish mutual consent between American English speakers: An analysis of the interaction of a problem-solving task. The 1st World Congress of Scholars of English Linguistics. 大韓民国、漢陽大学. (2012)

⑯ Kataoka, Kuniyoshi. Intersubjective Co-construction of Virtual Space: A Multimodal Analysis of Japanese Route-finding Discourse. The 6th Conference on Language, Discourse, and Cognition (CLDC 2012). National Taiwan University, China. (2012)（招待）

⑰ 井出祥子・櫻井千佳子「『場の理論』から見た言語」第 13 回日本認知言語学会ワークショップ「場の言語学とは何か」. 大東文化大学. (2012)

⑱ Ueno, Kishiko. Role Interaction in Vertical Relationship: An Analysis of Questions in Japanese Teacher-Student Conversation. Sociolinguistics Symposium 19. Berlin, Germany. (2012)

⑲ Ide, Sachiko. Rethinking Linguistic Politenessf from the Perspective of Ba Theory. Berkeley Workshop on Emancipatory Pragamatics. University of California, Berkeley, California, USA. (2013)

⑳ Kataoka, Kuniyoshi. Transformation of multimodal signs into narrative: A case of a Japanese TV commercial. Emancipatory Pragmatics Workshop. University of California, Berkeley, California, USA. (2013)

㉑ Fujii, Yoko. Differences of cultural practices in Japanese and American English interactional styles. Mister O Corpus Closed International Workshop. 日本女子大学. (2013)

㉒ 藤井洋子「合意形成過程における相互行為の言語文化比較–日本語とアメリカ英語の比較分析–」第 7 回 話しことばの言語学ワークショップ. 慶應義塾大学. (2013) （招待）

㉓ Fujii, Yoko. Social indexicality of the ‘zero’ form of address terms in Japanese: The interpretation from the Amae concept on the basis of ‘inseparable self and the other’. The 13th International Pragmatics Association. New Delhi, India. (2013)

㉔ Ide, Sachiko. Rethinking Wakimae Aspect of Linguistic Politeness in terms of Ba Theory: The Case of Person Referents. The 13th International Pragmatics Association. New Delhi, India. (2013)

㉕ Abe, Keiko. How do people describe their problems in advice-giving discourse? The 13th International Pragmatics Association. New Delhi, India. (2013)

㉖ Kataoka, Kushoyoshi. What makes multimodal sings into a narrative?: A case study of a TV commercial narrative. The 13th International Pragmatics Association. New Delhi, India. (2013)

㉗ Horie, Kaoru. Distribution of Stance-related Functions in Japanese and Korean: Nominalization vs. Verbal Structure. The 13th International Pragmatics Association. New Delhi, India. (2013)

〔図書〕（計 12 件）

① Ide, Sachiko and Ueno, Kishiko. Honorifics and address terms. Pragmatics and Society, Karin Aijmer and Gisle Anderson (eds.). 34-78. Mouton de Gruyter. (2011)

② 井出祥子「サステイナブルな地球のための異文化コミュニケーションー: 個人主義の論理と場の論理」『異文化コミュニケーション学への招待』鳥飼玖美子他（編）247-268. みすず書房. (2011)

③ Horie, Kaoru. Versality of nominalizations: Where Japanese and Korean Contrast.

Nominalizations in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspectives, Foong Ha Yap, Karen Grunow-harsta, and Janick Wrona (eds.). 473-497. John Benjamins. (2011)

④ 片岡邦好「こらむ：間主観性（相互主観性）」『コミュニケーション能力の諸相―変移・共創・身体化―』片岡邦好・池田佳子（編）258-260. ひつじ書房. (2013)

⑤ Hanks,William, Ide, Sachiko and Katagiri, Yasuhiro (eds.) . Journal of Pragmatics, Special Issue on Towards an Emancipatory Pragmatics. Elsevier. (2012)

⑥ 井出祥子・藤井洋子（編）『解放的語用論の挑戦ー文化・インターアクション・言語』くろしお出版. (2014)

⑦ 井出祥子「解放的語用論とミスター・オー・コーパスの意義－文化・インターアクション・言語の解明のために－」『解放的語用論の挑戦－文化・インターアクション・言語』井出祥子・藤井洋子（編）1-32. くろしお出版. (2014)

⑧ 藤井洋子・金明姫「課題達成過程における相互行為の言語文化比較‒日本語・韓国語・英語の比較分析‒」『解放的語用論の挑戦－文化・インターアクション・言語』井出祥子・藤井洋子（編）57-90. くろしお出版. (2014)

⑨ 堀江薫「文末名詞化構文の相互行為機能－日韓語の自然発話データの対照を通じて－」『解放的語用論の挑戦－文化・インターアクション・言語』井出祥子・藤井洋子（編）33-55. くろしお出版. (2014)

⑩ 片岡邦好「課題達成談話における日英語話者の視線について－共通点と相違点からみる文化的行為－」『解放的語用論の挑戦－文化・インターアクション・言語』井出祥子・藤井洋子（編）123-155. くろしお出版. (2014)

⑪ 片桐恭弘「対話から見た権威の様態について－能力と敬意－」『解放的語用論の挑戦－文化・インターアクション・言語』井出祥子・藤井洋子（編）157-174. くろしお出版. (2014)

⑫ 植野貴志子「問いかけ発話に見られる日本人の先生と学生の社会的関係－日英語の対照を通して－」『解放的語用論の挑戦－文化・インターアクション・言語』井出祥子・藤井洋子（編）91-122. くろしお出版. (2014)

〔その他〕
ホームページ:「文化・インターアクション・言語－解放的語用論を求めて－」
http://www.emancipatorypragmatics.org/

６．研究組織

(1) 研究代表者
藤井　洋子（FUJII YOKO）
日本女子大学・文学部・教授
研究者番号：30157771

(2) 研究分担者
井出　祥子（IDE SACHIKO）
日本女子大学・文学部・客員研究員
研究者番号：60060662

阿部　圭子（ABE KEIKO）
共立女子大学・国際学部・教授
研究者番号：90231951

片岡　邦好（KATAOKA KUNIYOSHI）
愛知大学・文学部・教授
研究者番号：20319172

片桐　恭弘（KATAGIRI YASUHIRO）
公立はこだて未来大学・システム情報科学部・教授
研究者番号：60374097

堀江　薫（HORIE KAORU）
名古屋大学大学院・国際言語文化研科・教授
研究者番号：70181526

高梨博子（TAKANASHI HIROKO）
日本女子大学・文学部・准教授
研究者番号：80551887

植野　貴志子（UENO KISHIKO）
東京都市大学・共通教育部・講師
研究者番号：70512490